

公共図書館における空間の快適性に関する基礎的研究

廣瀬 智鶴

近年、図書館もサードプレイスとして位置づけられていることが増えてきている。その背景として、滞在型図書館や複合型図書館といった利用者が図書館で居心地よく過ごすことのできる図書館が近年増加している。

サービスやコレクション、研修等については、それぞれの自治体において図書館評価が行われてきている。しかし、居心地の良さ、過ごしやすい空間であるかなどといった点については評価が行われていない。ゆえに本研究では、読書や作業等の様々な場面において居心地がよく、快適に過ごしやすい環境とはどのような空間を指すのか、様々な環境要因を実測し、同時に情報行動を観察することで検討する。公共図書館における快適な空間を検討することで、現在の公共図書館の空間の実態と利用を把握することを本研究の研究目的とする。

研究方法は、調査対象施設において音、照度、温度、湿度を複数の場所、複数の時間で実測する。そのうえで、利用統計のデータや場所、時間等も考慮し、様々な場所とも比較を行いながら公共図書館における快適な空間とはどのような空間を指すのか調査する。調査対象施設は、滞在型図書館や複合型図書館等の空間構成に力をいれている図書館や、利用人数の多い図書館、少ない図書館等をあげる。またその他にも、カフェやラーニングコモンズ等でも調査を行う。調査を行った公共図書館は延べ22館、他のサードプレイスは延べ5か所となった。

各環境要素と快適性指標であるPMV、PPDならびに統計データとの相関係数を算出した。その結果、照度と蔵書冊数あたりの貸出冊数、人口あたりの来館者数、さらに有効登録者数あたりの来館者数との間で負の相関がみられ、音とPMV、PPD、人口あたりの来館者数、蔵書冊数あたりの貸出冊数との間でも正の相関がみられた。ゆえに、照度と音は重要な指標であることが明らかになった。特に音に関しては、PMVやPPDと正の相関にあったことから、快適性という面において関連性がみられた。このことは、公共図書館における快適性ということを考える際に、必ず着目しなければならない点だと考えられる。

また、快適性指標であるPMVを算出した結果と、主観評価の結果が必ずしも一致しなかったことから、公共図書館における快適性はPMVの値のみでは示すことができないことが明らかになった。さらには利用者の情報行動や主観評価を行い、空間の広さや什器へのこだわりも快適性と関係しているとも考えられる。

今後、公共図書館における快適性指標を数値化し、視覚化することが課題となってくる。この数値化には先ほどあげたPMVだけでなく、音や照度などの多方面において考慮することが必要不可欠ではないかと考えられる。

(指導教員 池内淳)